

北東アジア関連図書5000点余 —在野の収集家・高橋勇氏が寄贈— 旧満州中心に近・現代史の貴重資料



生田図書館に、このほど中国・旧満州を中心とした、北東アジアの近・現代史に関連する図書や各種資料が、埼玉県草加市の高橋勇氏から寄贈され、来春「高橋勇文庫」としてデビューすることになった。

本学の新井勝紘文学部教授が2年前まで千葉県佐倉市の国立歴史民俗博物館に在籍していた機縁から、芝山町立芝山古墳・はにわ博物館友の会の高橋氏が、22年間集めた蒐集資料を寄贈の意向があることを知り図書館と協議、このうち図書を受け入れることになったもの。

「この蒐集は明治期から現代にいたるまで、わが国で出版された文献類を中心として、5000点余に及ぶもので、民間の人が旧満州に関するものを、これだけ集めたコレクションはめずらしい」と新井教授は言う。

義勇軍として満州に渡り、病を得て帰国し、戦後間もなく亡くなった兄のことを知りたくて、満州関係の文献を集めるようになったという、高橋氏の執念がこもっている文献である。

この「高橋勇文庫」は「旧満州の正史というより、野史を中心に集めた」もので「埋もれていた満州史の発掘に重点が置かれて」いる。

近、現代史のゼミで32人の学生を指導する新井教授は「これだけまとまって一つの図書館に収蔵されると研究がしやすい。戦前の満州の研究にも役立つが、戦後日本がどのように満州を見てきたか。国民の関心の持ち方。報道や芝居、小説でどう取り上げられたかなど多面的角度からテーマを立てて分類しており、授業にもすぐ活用できる生きた教材です」と話している。

〔11月15日/ニュース専修11面〕

## インターネットを賢く使おう ■ 電子メールとネチケット① 専修大学WEBマスター 八箴克彦

シリーズ第1回で「ネチケット」について触れたら「エチケット」の誤植じゃないかという質問が来ました。あまり一般的な言葉とはいえないから無理もないけれど、これはインターネット、特に電子メールを使うときに一般的に守るべき約束ごとの意味で、ネット+エチケットの造語です。

電子メールといっても、普通の手紙等といったどこが違うのでしょうか？簡単に手紙と電子メールを比較してみると、電子メールはスピードが速いのとコストが比較的にかからず、いつでも利用できる場所ではないかな？

パソコンや電話機、あるいは情報端末と呼ばれる簡単な装置でいつでも簡単に利用できるのも、最近では比較的、公的な文書にも、電子メールが使われるようになってきたことは確かだね！ただ、手軽にだれでも利用できるために、その使い方だけで相手に対する思いやりに欠けた対応をしたり、この通信手段だけにある約束を守らないためのトラブルも増えているのは残念なことです。従来の通信手段と電子メールの特性を十分理解して、うまく利用するようにしたいものです。

もうひとつ気をつけたいのは、秘密性のことです。原則的には秘密の通信には利用しないほうがいいでしょう。高度の秘話システムを採用しているものもあるにはありますが、一般のプロバイダー（接続業者）や大学内での通信では、第三者に通信の内容がもれる可能性があることを意識して使うべきです。また、ある人から知らされた情報や個人の秘密を無意識に、あるいはうっかりと他の人に転送してしまったり、他人のメールアドレスを不用意に公開してしまうようなミスに起因するトラブルは、よく耳にすることです。気をつけたいことです。

〔11月15日/ニュース専修11面〕

先駆的な遠隔授業 望月ゼミ 米ハーバード大と専大間で実験に成功



ハーバード大を訪れたゼミ生と望月教授



望月教授の研究室で

経済学部望月宏ゼミでは、米ハーバード大学に在外研究員として赴任していた同教授とボストンに研修に来ていたゼミ生が、生田キャンパス内のゼミ生との間で公衆インターネット回線を経由した実験ゼミ演習を行った。

9月3日、日本時間午前8時から生田120年記念館の望月研究室にゼミ生が参集、一方、ハーバード大学の望月教授研究室(ライシャワー研究所内)にはゼミの海外研修としてボストンを訪問中の5人のゼミ生が前日の夕刻7時に集合した。ビデオカメラでお互いの研究室内を撮影しながらパソコンのサーバーに情報を蓄積、それを発信しモニターに展開される仕組みで、双方のモニター画面に日本とアメリカの様子が写し出され、音声交換もスムーズに行われた。

今回の実験の目的は、専用回線ではなく一般の公衆回線を使い、海外との間で遠隔授業の一環としてゼミ活動を行うというもので、国境を越える授業の先駆的な実験である。日米間でこのような実験を行う場合、インターネット環境の違いや13~14時間の時間差に加え、利用が集中する時間帯を避けなければならないなどの多くの超えるべき課題がある。

専用回線ならリアルタイムも可能だが、オンデマンドはサーバーに一度データを溜めてから発信するため、実験では日本とボストンとの通信による応答時間差は最短2秒、最長10秒位となった。しかし動画は思った以上になめらかで音声も比較的良好であり実用に耐えうる範囲だと双方の参加者は判断した。

参加した学生の1人は「前回の実験時より優れています。画像も音声も良かった。対人ゼミとの違いは、一対一で話している人以外の相手が見えず、その反応が分からないところ。これはビデオ撮影の問題で、撮影者の技術向上と設備の充実が必要だと思います。今後、携帯端末による海外からのレポート報告や学生同士のディスカッションにもチャレンジしてみたい」と話している。

望月教授は「今回の実験の成功は日立製作所の全面的サポートによるところが大きく、今後、同社との協力により一段とレベルアップが図れるものと期待しています。今後、国際交流で提携校との講義の交換など、よりグローバルな勉学環境が提供できるほか、生田・神田間では専用回線でリアルタイムの送受信が可能なので、二部(夜間部)、大学院の授業、市民講座での活用なども含め、遠隔授業は身近なものになって来るのではないのでしょうか」と結んでいる。

[11月15日/ニュース専修11面]